

当社は、主食であるお米を精米する機器を研究・製造・販売している専門メーカーです。平成7年の食糧管理法改正に伴い、これまで農家向けに製造を行っていた精米機の市場は大きく変化しました。ホーム精米機からコイン精米機まで、「精米」することが素晴らしいということ、1人でも多くの皆さんに知って頂きたいと思っています。

また、近年の環境問題に適応し、精米機から出る米ヌカを再利用する機器「ペレ吉くん」の開発にも成功し、環境創造型農業の一翼を担っています。

今後も、『創造と感動』のスローガンのもと、世の中のニーズに合った高品質の商品をお客様と共に考え開発していきたいと思っています。

【卒業生の声:田中 敏晴】

現在の県立大学の前身である富山県立技術短大の卒業です。在学中はエンジニアリングセラミックの高効率研削加工に関する研究を行い、精密工学会での論文発表も経験させて頂きました。現在は機械の開発や制御の業務についています。昨年、新製品の振動を低減するために試行錯誤していた際に、母校の野村先生にアイデアを頂戴し解決できたことを覚えております。今後も大学と繋がりをもちながら仕事をしていきたいと思っています。



1990年卒業

地球環境創造
TOYOX 株式会社 トヨックス

創業以来、工場機器の設備ホースや、建築・建設用の作業ホースを始め、家庭用、園芸用ホースに至るまで、あらゆる分野のホースを開発し、様々な用途で役割を担っております。さらに現在では、環境保護対策として、ダイオキシン対策・環境ホルモン・二酸化炭素削減・リサイクルのテーマにも取り組み、ホースと関連機器を含めた総合的な流体輸送システムをご提案させて頂いております。

近年では、当社のホース技術を応用し、人と地球に最も配慮した自然の冷暖房『輻射冷房システム』も手がけております。今後も創業以来培われた開発力で、独自性のある新製品・新システムを開発し、お客様のご要望にお応えさせて頂きます。

【卒業生の声:住吉 洋一】

研究テーマとは多少分野が異なりましたが、面白そうと思い入社しました。現在は新商品開発やコストダウンを手がけています。卒業した大学と今でも関係を持っているのは不思議な感じもします。今後は、共同研究やMO T講義などでも母校と関わっていききたいと思っています。



2005年卒業

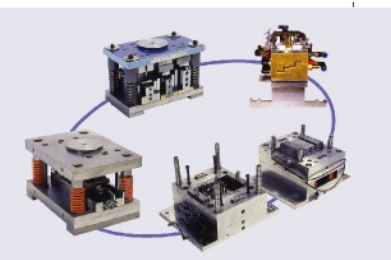
株式会社 マスオカ

1959年の創業以来、金型メーカーとして積極的に企業活動を推進してきました。「お客様が何を必要とされているか、いかにお客様のお役に立てるか」を基本理念とし、アルミ形材加工金型や樹脂加工金型にとどまらず、あらゆる素材の金型にチャレンジし続けており、アルミ形材加工機械も手がけています。さらに新規事業として食品関連事業・物流関連事業にも挑戦しております。また、当社の金型製造技術を活かし、ベトナムでも事業活動を行っております。

創業当初から“人とその育成”を重要な経営資源の1つとして捉えており、社員の物心両面での幸せと社会貢献を基本に、社会的にも存在価値のある企業となるために、知恵と勇気を発揮し主体的・積極的に行動致します。「お客様の顔が見える」を基本的な姿勢として、お役立ちの精神で、お客様に喜ばれる良い製品作りを目指します。

【卒業生の声:山崎 真理】

卒業研究の課題と同じようなことができると思い入社しました。学生の頃は理論的なことばかりを捉えていましたが、会社に入り「ものづくり」の奥深さを痛感しています。営業設計課で勤務し7年目になりますがまだまだ勉強することばかりです。今後は、母校との共同研究等にも携わり、先生と学生という立場ではなく、ビジネスとして先生にお会いできるのを楽しみにしています。



2000年卒業



共同研究 事例紹介



第一ファインケミカル株式会社

■きっかけ■

県立大学生物工学研究センター創設時、浅野先生が富山にいらっしゃった時に、研究室に1人目の研修員を派遣してからのお付き合いです。社会人博士課程での博士取得者を含め、現在、3人目の研修員を派遣し、共同研究を行っております。

■成果■

浅野先生ご専門の酵素法に関する共同研究も2年目に入り、有望活性菌の絞込みという山場を越え、現在は酵素精製・遺伝子解析を行っているところです。先生を含めた研究室の経験・知識・情報収集力などにより、企業単独の研究開発に比べ、研究内容の質及びスピードにおいてかなりの効果を感じております。工業的製造法の確立を数年以内との目標で推進しております。

■産学連携の活性化には■

もっと大学のシンクタンクとしての機能をフランクに使えるようになればいいのではないかと思います。そういう意味で県立大学は注目すべき活動を行っていると感じています。しかし、当社のように、以前から先生と親交がある場合は気になりませんが、大学と関係を持ったことのない企業にとってはまだまだ敷居が高いのではないのでしょうか。現時点では、大学側に問題があるのではなく、受け皿である企業の認知度がまだ広く高まっていない現状があるということだと思います。もう少し長い目でみる必要があるのではないのでしょうか。



〈浅野教授〉

今年度から生物工学科が新設されました。これまでには生物工学研究センターという研究所に付随した大学院修士および博士課程のみでしたので、卒論テーマ募集事業などには参加していませんでした。しかし、バイオの分野は実用的な研究が比較的多く、センター創設当初から共同研究を全国的に行っており、大きな成果を上げております。今後は協励会に積極的に参加し、県内企業様との交流を深めたいと思います。環境問題の解決が重要課題となる近年、バイオの分野は医薬、食品、化学等の分野のみならず、機械や電子の分野にも関連性が深いことを知って頂き、様々な業界の方にご利用頂きたいです。

またリクルート面においても、県内企業様にご協力をお願いいたします。今年入学した40名の1期生も2年後には就職活動に入ります。バイオ分野の魅力を県内企業様にも知って頂き、卒業生が活躍できるフィールドを作ることも今後の課題です。

担当教員の声

〈中島教授〉



テイカ製薬様とは、モバイルラボを通して交流を深めさせて頂きました。昨年度の研究は大学でベースを創り、テイカ製薬様で応用研究を行うという形式で進めておりましたが、今年度からは知能デザイン工学科の大谷先生の協力も頂いており、より具体的な研究を進めることができいております。特許の取得も視野に入れている状態です。

今後はバイオの分野にこだわらず、幅広い企業様と協力関係を築いていきたいです。バイオというと機械や電子の企業様には全く関係ないと思われがちですが、物を作り世に出すという部分は同じです。研究開発においてもライン製造においても同じ製造業として課題を共有できるはずで、バイオの知見をバイオ以外の分野の方々へ広めていくのが今後の課題であると考えております。

テイカ製薬株式会社

■共同研究のきっかけ■

外部の交流会で中島先生のことを知りました。また、大学が進めておられます企業訪問「モバイルラボ」でも当社においで頂き、親交を深めさせて頂くことができました。そのようなご縁があり、界面活性剤に関する共同研究をさせて頂くこととなりました。

■共同研究を行ってみて■

共同研究を始めて2年目になりますが、新商品開発に向けた方向性は定まってきました。医薬の業界において、全く新しいものを作るということは、特許化も含めて非常に価値の高いことなのです。大学にはそれを可能にする基礎理論があり、それを動かすことのできる人がいます。共同で開発させて頂けるメリットは大きく感じております。

また、大学というインフラを通して、様々な業界・業種の方々と繋がりを持つこともできました。地域でこと業を展開していく上で、企業同士の横の繋がりも重要なことであると感じております。

■今後の展望■

今後は新しい製品を発売することが大きな目標です。また、既存の技術に捕らわれず新しい展開を行うためにも、地域連携センターを通して、他講座への展開も行っていきたいと考えております。